



GLOBE

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp>

国際文化研究科 広報
PUBLIC INFORMATION MAGAZINE

No. 30

November 2017

CONTENTS

- 02 研究科長メッセージ
- 03 講座紹介
ヨーロッパ・アメリカ研究講座
国際環境資源政策論講座
- 05 前期課程・後期課程修了者からのメッセージ
村松 諭
王 俊
近藤 百世
- 07 新任教員紹介
佐藤 正弘 准教授
鄭 嫣婷 講師
- 08 退職教員の言葉
小林 文生 教授
佐藤 研一 教授
- 09 研究紹介
勝山 稔 教授
- 10 最近の著作から
山下 博司 教授
佐藤 透 教授
クラウタウ, オリオン 准教授
- 12 平成29年度科学研究費補助金採択一覧
- 13 INFORMATION
オープンキャンパス2017報告
平成28年度外交講座報告
第23回国際文化基礎講座
日本学ワークショップ報告
日露ワークショップ報告
第24回東北大学国際文化学会総会報告
講演会報告
- 14 研究科入試情報



研究科長メッセージ

国際文化研究科長 小野 尚之



現在、私たち国際文化研究科に所属する教員や学生は、一つのことをしっかりと心に留めておかなければなりません。それは、国際文化研究科の研究・教育の主要な分野である人文社会分野の研究が、日本において、いまだかつて経験したことのないような危機的

状況にあるという事実です。多くの人の記憶に新しいことだと思いますが、少し前に国立大学における「人文社会研究不要論」とも言えるような極端な意見が一部メディアなどで取り上げられたこともありました。このような意見は極論ではありますが、そのような空気が決してなくなったわけではありません。今、逆風の中に置かれている全国の人文社会系の研究科・学部は、その存在意義を社会にアピールしていく必要に迫られています。

このような状況で、先ごろ本学が「指定国立大学法人」に選定されことは大きな意味を持ってきます。指定国立大学とは、世界最高水準の教育研究活動を展開する実力と潜在能力を認められた国立大学で、現在のところ、本学と東大、京大の3大学が指定を受けています。この指定国立大学法人が目指す世界水準の教育研究活動には、研究科の枠を越えた連携によって構築する国際共同大学院構想が大きな位置を占めています。本研究科は、その中の「日本学」と「災害科学・安全学」の二つの構想に関与しています。前者は、文系の各研究科と共同で進めているものであり、後者は、環境科学研究科や災害科学国際研究所などと共に進めています。両構想とも再来年度には具体的なプログラムがスタートする予定です。さらに、本研究科の強みを活かして、グローバル共生社

会系の英語コースの新設や言語系の世界水準の学位プログラムなど、積極的に新しい方向性を打ち出していくチャンスであると言えます。

本研究科は、発足当初から学際的かつ総合的なアプローチによって教育・研究を推進することを目標に掲げて来ました。近年のグローバル化する世界において、ある特定地域のローカルな問題であってもグローバルな視点からの解決が求められるようになってきました。その際、単に視野を広げるということだけでなく、異なる理論的アプローチによって複合的に物事を考えるということも大切になってきます。例えば、先にあげた日本学という学問は、一言で言えば、日本の社会、歴史、文化などの本質を明らかにする学問ですが、単に一国の社会や歴史の問題にとどまらず、そこから人類社会に共通する問題へ敷衍していくことが重要になります。つまり、個別性を普遍性へ繋ぐ視点が欠かせないわけです。それを可能にするには、学際的な研究が必要になります。本研究科の学生の皆さんには、本研究科の特質とも言える学際性について今一度考えてもらいたいと思います。人文社会系研究の危機が叫ばれる中で、本研究科の学際性が道を拓く鍵になるのではないかと期待しています。



講座紹介

ヨーロッパ・アメリカ研究講座

近年、西洋史学界では「アトランティック・ヒストリー」という研究分野が興隆を極めています。その特質は、従来の一国史的観点を克服し、文字通り、大西洋を取り囲むヨーロッパ、南北アメリカ、アフリカの四大陸に有機的な関連を見出し、そこから重層的な歴史過程を描き出そうとすることにあります。国境を越えたモノと人の移動が織りなす様々な事象の連鎖構造を明らかにすることで、大西洋という海が決して障害物だったのではなく、むしろ域際的空間を構築するうえで重要な役割を果たしたということを明らかにしました。「海の歴史」が盛んになっているゆえんです。

本講座の教育理念もまた同じことが言えます。現在、本講座のもとで学ぶ学生のテーマは、フランスの服飾研究・教育制度研究・都市計画研究・翻案映画研究、アメリカの文学研究・黒人運動研究・人種音楽研究など多岐にわたっています

が、学生は自分の専門に「沈潜」してしまうのではなく、バラエティに富む各教員の講義や演習などの授業、学生が中心となって組織している研究会、院生室での気のおけないおしゃべりなど、さまざまな「海」を「航海（漂流?）」することで、ひとりひとりが自分の研究を広い視野からとらえることができていると自負します。

グローバル化が加速的に進む現在、それを牽引してきたはずのヨーロッパでも、アメリカでも、この動きに抗する動きが生じています。こうした混沌とした状況からこれからの世界がいかなる方向に向かうのか、そして私たちはそのなかでいかに生きていくべきなのか。こうした問題意識のもとに、私たちはヨーロッパ・アメリカ研究講座という「学海」の中で過去のヨーロッパやアメリカの社会と文化に問いを投げかけています。



国際環境資源政策論講座

世界の経済成長や人口増加に伴い、気候変動や生態系の破壊、自然資源の枯渇といった地球環境問題はますます深刻化しています。国際環境資源政策論講座では、学際的・国際的な視点に重きを置きながら、地球環境問題の解決に資する知識の創出と人材の育成に当たっています。

当講座の第一の特色は、「総合科学的アプローチ」です。環境問題の多くは、気象や生態系などの自然科学的な現象に、経済システムや政治システム、人口動態、さらには社会規範や文化などが複雑に絡み合う形で発生しています。したがってその解明には、環境科学、生態学、工学、経済学、心理学等の知識を駆使し、問題を多面的に検討する総合科学的アプローチが必要になります。

第二は、「国際的視野の重視」です。各国・地域で生じている環境問題の多くは、グローバル化によって相互に有機的につながっています。また、同じ問題でも、その国・地域の経済状況や文化的背景によって立ち現れ方が全く異なることもあります。そのため、当講座では、海外の大学や国際協力機関との連携、国際共同研究の実施などを通じて、常に国際的視野から改善策を模索しています。

第三は、「実践の重視」です。アプローチは様々ですが、当講座の最終目標は、現実の問題の解決にあります。そのため、当講座では、政策の実務経験が豊富な教員を配するほか、環境問題に取り組む企業との連携や地域の協力を得ながら現場重視の姿勢で研究・教育活動に当たっています。



前期課程・後期課程修了者からのメッセージ



多文化共生論講座
平成29年3月
博士課程前期2年の課程修了

村松 諭

未来の自分を 想像して現状と 並行させる

大学院は研究の場ですが、同時に自分を成長させる場でもあると思います。前期課程を振り返ると、周囲の皆様にご支援いただいたおかげで、実りある二年間を過ごすことができました。そんな生活のなかで、私が常に心掛けていたことが二つあります。

一つ目は尊敬し、信頼を寄せる人にすぐに相談することです。悩みごとや何か問題があれば、一人で抱え込まず、相談することで解決を早めることができます。つまり、悩む時間が短縮されることで別の問題や課題に取り組むことが可能になります。また、一人で出した答えより優れた答えを得ることができるかもしれません。ただし、受け身の姿勢で解

決してもらうのではなく、あくまで自分が主体となって問題を解決することを忘れてはなりません。

二つ目は常に修了後の人生を想像することです。大学院生にとって、論文を提出することは、一つの目標だと思えます。しかし、それはゴールではなくスタートです。研究と並行しながら、修了後に自分はどうなりたいか、どう生きていきたいかを常に想像することが、次のステップに繋がりがやすくします。自分の負担を増やしてしまっていますが、頭の片隅に置いておく必要があると思います。

現在は大学院で取り組んだ研究とは関わりのない半導体業界に身を置いています。これまで学んできた専門知識が活かせない環境です。しかし、大きな課題に挑戦し続ける姿勢が活かされています。この姿勢こそが私が大学院で学ばせてもらった大きな財産の一つとなっています。



言語文化交流論講座
平成29年3月
博士課程後期3年の課程修了

王 俊

後輩の皆さんへ

いまだに四年前の2013年の9月に、初めて日本の大地に足を踏み入れた際の感動をはっきりと覚えています。今振り返ると、あっという間という感じがしますが、本当に様々なことがあり、胸中は充実感でいっぱいです。

大学三年生になって、将来は中国の大学で日本語の先生として日本と一生関わっていきたくて考えるようになりました。修士課程や博士課程に入っても、その志を曲げず、地道に一步一步努力をしてきました。そして今、ようやく先生という職業に就くことができました。今後、一生この仕事に携わることになると思いますが、いつになっても初心を忘れずに、楽しんでやっていきたいと思っています。

もちろん、長年の夢を叶えることができた

のは多方面にわたる方々から支えられていたからこそだと思います。指導教官の佐藤勢紀子先生をはじめ、奨学生として受け入れてくださった研究科のおかげで、この四年間、研究に専念することができました。生活上の心配をしなくてすみ、かつ様々なイベントにも参加することができました。そのほか、講座の先生方や学生の皆様からも日ごろより暖かいお言葉や適当なアドバイスをいただいたことにもお礼を申し上げたいと思います。

日本に来て、新しいことをたくさん体験することができ、そして色々な素敵な出会いに感謝しています。今後、これらの素晴らしい経験を糧に成長していきたいと思っています。後輩の皆さん、特に留学生の皆さん、日本での研究と生活を思う存分に楽しんでください。ゆくゆくそれは、きっと一生の思い出になるでしょう。



イスラム圏研究講座
平成29年3月
博士課程後期3年の課程修了

近藤 百世

学問と向き合う ということ

学問と正面から向き合うこと、というのが私の大学院進学の際の最大の目的でした。学部時代よりも更に深い教養を身に付け、高度な専門知識を獲得し、学者としての一歩を踏み出したいという願いから、私は本研究科の旧イスラム圏研究講座博士前期課程に入学しました。そこで先生方からの厳しくも温かいご指導の下その歩を進め、紆余曲折を経ながらも、平成27年3月に博士号を取得いたしました。

この長い歩みの中で、私は、学問と誠実に向き合うことの楽しさと苦しさを味わいました。中でも私にとって最大の難問であったのは、「何故このテーマを研究するのか」という問いでした。この課題は至極簡単な問いに見えて、とても奥が深く、様々な課題を引きずり込んでくるとも厄介な存在です。私はこれに答えるために、様々な経験を積み、知識を身に付けて成長しなければなりませんでした。

私にとって幸運であったのは、講座の先生方が研究面で強力なバックアップをしてくださったことです。特にご厚意で開いてくださった読書会などを通して、研究に必要なペルシア語とアラビア語の読解能力を身に付けるこ

とができました。また、東北大学の交換留学制度を利用し、東北開発記念財団や松下幸之助記念財団の後援を得て、テヘラン大学へ留学できたことも大きな契機となりました。この時、現地調査を行う傍ら、イラン研究に携わる内外研究者の中に知己を得ることができ、一生の宝となりました。

私を最も成長させてくれたのは、研究科の先輩方が講座の枠を超えて結成された小さな勉強会でした。毎回全く異なった専門研究の成果を聞き、活発な意見交換ができたのは、大変新鮮で刺激的な体験でした。私はここで何度も「何故このテーマを研究するのか」という問いと向き合わされ、学問に対して誠実であり続けることと弛まぬ精進が同義であることを痛感させられました。

このように、私は国際文化研究科で様々な経験を積み重ねていただき、学問と向き合い続け、博士論文を完成させることができました。学生生活というのは長い苦しみの連続であり、中でも博士論文の執筆は、暗中模索の孤独な歩みとなります。しかし、今、こうしてその一里塚を過ぎてみると、これらの歩みは、周りの人たちの支えがあってこそのものであったと感謝の念に堪えません。

最後となりましたが、長きにわたる研究生生活を支えてくださった講座の先生方、研究科の教職員の皆様方に御礼申し上げますと共に、研究科の後輩の皆様方のご活躍をお祈りしております。



新任教員紹介



国際環境資源政策論講座
准教授

佐藤 正弘

2017年4月に国際環境資源政策論講座の准教授として着任いたしました、佐藤正弘と申します。神奈川県生まれ東京育ちで、東北に住むのは初めてです。

大学院卒業後は内閣府に就職し、マクロ経済政策の立案、計量モデルを用いた日本経済の中長期の姿の試算、排出量取引制度の設計、企業の社会的責任の促進策などに携わってきました。またその間、米国ジョージタウン大学への留学を通じて本格的に経済理論を学んだほか、慶應大学や京都大学で教鞭をとり、2015年には京都大学で経済学の博士号を取得しました。

しかし、政策と学術との間を行き来するうち、両者の架け橋となるだけでなく、自分自身が学術的な価値の創造に貢献したいという気持ちが強くなり、キャリアの後半

は研究者としての道を進むことを決意しました。

専門は環境経済学で、水や生態系やエネルギーなどの自然資本の持続可能な利用を中心に研究をしています。京都大学在籍時には、水資源に焦点を当て、世界の人口増加や気候変動に対応した新しい水利用のあり方について研究を進めました。また、数年前から、ビッグデータの活用やネットワーク分析など、新たな分析手法にも挑戦しています。東北大学では、さらに情報学や物理学など異分野とのかかわりも積極的に模索していきたいと考えています。

経済学は数式だらけで難解なイメージが強いですが、学生の皆さんには、背後にある本質を理解してもらえよう心がけたいと思います。



応用言語研究講座
講師

鄭 嫣婷

2017年4月に応用言語研究講座に着任致しました鄭嫣婷と申します。2007年3月に本研究科博士課程を修了していますので、卒業生です。専門は言語脳科学です。特に、言語習得の認知メカニズムを、脳機能計測と行動計測を駆使しながら、解明することを目標にしています。そのメカニズムに基づいた効果的な学習法や教授法も積極的に提案しています。私が大学院教育で目指しているのは、言語脳科学の幅広い知識を習得し、新しい研究テーマを生み出し、成果を世界へ発信できる研究者の養成です。他分野を理解しようとする柔軟な考

え方を持ち、協力し合うという研究姿勢の重要性も伝えていきたいと思っています。その原点は、本研究科での修士・博士課程、東北大学加齢医学研究所、ペンシルベニア州立大学心理学科等に所属しながら、国内・国外の研究者と協働で、既存の研究分野の枠にとらわれず、様々な視点で学際的研究を行ってきた自分自身の経験にあります。学際的研究の楽しさに初めて出会ってくれた本研究科は、私のhomeと言っても過言ではありません。卒業生として、研究と教育の両面で精一杯恩返ししてまいりたいと思います。

退職教員の言葉

「国際文化」ふたたび



ヨーロッパ・アメリカ研究講座
教授

小林 文生

定年退職してからすでに一年半近くが経ちました。国際文化研究科には創設以来23年間、その前の教養部を含めれば29年間、更にさかのぼって助手時代から数えれば38年間の勤務を無事に全うできたことを素直に喜んでいます。研究科の皆様にはたいへんお世話になりました。

日本で初めて「国際文化」の名称を掲げる独立大学院として、国際文化研究科は発足当初から毎年継続して「特定研究費」が交付されるなど期待される一方、教養部廃止に伴う改編後の部局として、組織そのものの安定や学問分野としての確かさを疑問視する声もありましたが、それをはね返すように、これから新たな領域を共に開拓していくのだという熱気にあふれて、教員と院生が一体となって

議論の日々を積み重ねていたあの雰囲気、今はただ懐かしむばかりです。

ところが、昨年秋に院生たちが立ち上げた研究会にアドバイザーとして毎回参加して、院生の皆さんが自由闊達に議論し切磋琢磨の様子を見ていると、あの当時と同じ熱気が今ここに生きているという思いにうたれます。その研究会メンバーから3人が、今年度の日本国際文化学会全国大会で研究発表して好評を博したのは、本当に嬉しいことです。一方、東北大学国際文化学会は過渡期を迎えますが、これが新たな院生の研究支援体制に向けての、そして「国際文化」研究の推進力となることを願いつつ、研究科のますますのご発展をお祈りしています。

化石の戯言



ヨーロッパ・アメリカ研究講座
教授

佐藤 研一

あれはいつだったか、或る学内会議にてお歴々のひとりが開口一番、「大学組織の生産性に鑑みて…」と語り始めたので、驚いたことがあった。何事にも「有用性」や「効率性」を第一に掲げる、昨今の大学の姿勢が剥き出しになったな、と思ったからである。むろん私は「役に立つ」学問の重要性を否定するわけではない。しかし、学術研究・教育の場を「生産性」の一色で染め上げようとする考え方には、いさかか違和感を覚える。

さて、人文科学分野においても、「学際」や「越境」などの言葉がもてはやされ始めたのは、二十年余り前からであろうか。在職中に私は、教養部解体をはじめ、何度か改組を経験したが、そのたびに、「カビ臭い」原典精読第一の「文学研究」から学際的な「文化研究」へ専門を拡大せよ、と忠告を受けたも

のである。しかし、いくらみすばらしくろうが、今さら、着古した上着を脱ぎ捨てて、当世風の上着に腕を通すことはできなかった。要するに、頭が固い。

なるほど「文化研究」は「有用性」と相性がよい。だが、「現実追認」の危険とも背中合わせである。他方、「文学」は「文化」に収まり切る人畜無害なものでもなし、ひょっとしたら「無用の学」の「文学研究」も、「文化」という巨大な現実の総体に、批判の矢を放てやしないか。されば、逆風の空高く、凧を揚げつつけよう、などと粋がってみたくもなる。——こう、綴ったところで、脇から友人が口をはさむ。「おい、そういうのをな、蠅螂の斧という。」「まあな。でもさ、蠅螂力を合わせて車を覆す、ともいうぜ。」

研究紹介

私の研究

アジア・アフリカ研究講座 教授 勝山 稔

現在私の研究は大きく二つあります。一つ目には中国明代の白話（口語）小説を用いて、従来の歴史学的資料では見えづらい当時の民間風俗の解明を試みています。みなさんの中にも毎日日記を付けている人がいるかも知れませんが、そこではその日にあった特別なことが書かれることが多く、ごくごく日常生活描写については、詳しく書かれることはありません。それと同じく、歴代の官公庁の歴史記録には「ごく当たり前の日常」が書かれる事はほとんどありません。

そのため、歴史学では当時の「事件」や「大事」を把握するのは比較的容易なのですが、誰でも知っている当時の常識である日常生活の「あたりまえ」は、当然知っておくべき事として記録されません。ですから、歴史学では当時の人々が誰でも知っている常識的な日常生活であればあるほど記録に残されず、当時の「あたりまえ」が判らないのです。それを補完するために当時の通俗小説などの日常描写が注目出来るのです。現在は特に日常描写の中から「都市化による社会の変容」や「庶民層の富裕化に伴う庶民生活の変化」を中心に詳しく調べています。

二つ目には中国通俗小説が、どのようにして日本に浸透したのかを調べています。現在日本で『西遊記』や『水滸伝』『三国志』そして『紅樓夢』がこれだけ日本に浸透し、現在に至ってはサブカルチャーの一翼を担うようになったのですが、これらの作品は大学の研究者によって紹介されたわけではありません。むしろ明治時代から大正時代の民間の知識人がこれら通俗文学の翻訳を手がけ、その面白さを社会に広めたのです。

それではなぜ学者が『西遊記』や『水滸伝』の翻訳に躊躇

し、寧ろ民間の知識人がこぞって翻訳に取り組む事となったのか。それには相応の事情があります。例えば当時の中国文学の正統は古文（いわゆる漢文や文言）の読解であり、唐宋八大家（とうそうはちたいか）等の文章が理想とされました。この伝統ある古文の読解・解釈、これこそが江戸時代からの伝統を受け継ぐ漢文学として継承されてきたのです。

ところが宋元代から明清代になると、この種の正統的な古文の他に、極めて通俗的な口語（白話）による小説が一世を風靡したのですが、これらの文言から口語へという流れに当時の大学の研究者は対応できなかったのです。そこで、民間の博学好事家が文字通りに手探りで翻訳をはじめました。また明治末から大正時代になると日中航路の開設により民間レベルでの中国人との交流が活性化し、白話になじみが深い中国人の助力により様々な白話小説が翻訳されるようになりました。しかし学界では厳密なる解釈を経ていないこれらの翻訳を無視し、結局白話小説が学問の俎上に登るのは終戦直後からになり、翻訳作業が大きく立ち後れる原因になったのです。

私は、このような近代日本における中国文化の受容について、特に中国白話小説における民間翻訳の事例に注目し、異国の文化が日本人に理解され消化されていったのかその動態を詳しく研究しております。



警世通言



遣唐使船



最近の著作から

● 多文化共生論講座 山下 博司 教授

本学に在籍するインド人留学生は25名（5月1日現在）。総じて上位中間層以上のもので、殆どが文科省やグローバル30関連の奨学金に浴し、極めて優秀である。英語も達者。MITより難関とされるインド屈指の名門IIT（インド工科大学）の出身者もいる。

インドは2020年に人口で中国を、2035年にはGDPで日本を追い抜く。グーグルやマイクロソフトなど、著名なIT企業のCEOはインド生まれ。シリコンバレーでの起業の15%（2014年）はインド亜大陸出身者によるもの。米国で移民が設立したIT企業の数でインドは他を圧倒し、2位以下の4カ国（英国、中国、台湾、日本）を合わせた数よりも多い。IT以外に政治や医療への進出も著しい。

本書では、著者の10年余の滞在経験を駆使し、彼らの活躍を支える様々な「力」一言語力、数学力、交渉力、発信力、忍耐力、統率力などについて、歴史、思想、教育、文化・社会事情に遡って解説する。7月には台湾の晨星出版から中国語版『下一站・印度—印度人的「能力」與「腦力」、縱橫跨國領導者激増的秘密—』も出た。現代インドの動態は、山下・岡光『新版 インドを知る事典』（2016年）も参照されたい。



『インド人の「力」』
山下博司、講談社現代新書、
2016年刊



● 多文化共生論講座 佐藤 透 教授

日本文化に興味を持った外国の方から「わび・さびって何ですか」と聞かれたら、どう答えればいいでしょうか。日本で暮らす私たちは、「わび・さび」という言葉を耳にしたことはあっても、それがどのような美意識なのか、わびとさびはどう違うのか、それらが美一般からみてどのような特性をもつのか、といったことは普段あまり考えません。その背景には、これらの概念の背後にある禅思想が言語的概念化を嫌うということや、そもそも美や芸術の本性は何かという一般的な問題が何ら解決済みではないという事態もあるようです。

本書では、まずとりわけドイツの哲学者カントの美学や現象学的美学を手引きとしながら、美と芸術の機能を考察し、そうした一般的考察に基づいて、わび・さび・幽玄という日本の美意識の特殊性を明確にしようとしています。『美と実在』というタイトルは、人を日常的な実用的態度から引き離し、世界の真相を開示するという美と芸術の一般的機能が、日本の美意識においては際立っているという立場を表しています。折り鶴と石榴色（和色）の帯が目にとまったら、どうぞ中も覗いてみてください。



『美と実在—日本的美意識の
解明に向けて—』
ナカニシヤ出版、2016年11月29日、
xii + 202頁

● 国際日本研究講座 オリオン・クラウタウ 准教授



『戦後歴史学と日本仏教』

オリオン・クラウタウ編、法蔵館、2016年

近代日本における歴史的過程で、仏教者は制度的な次元のみならず、イデオロギーの次元においても、日本帝国の領土拡大のための戦争に協力した。このことは、当該時期の専門家でなくとも、周知に属そう。1960年代以降、近代日本仏教研究がさかんになる大きな動機の一つには、こうした「天皇制国家」を支えた仏教に対する批判と反省があった。しかし、2000年代以降、近代日本における国家と仏教をめぐる研究が次々と発表され、その関係の内実が様々な方面から検討された。とはいえ、こうした戦前期に関する研究成果の蓄積に対して、敗戦を経て、「日本仏教」の語り方がどのように変遷したかをめぐる考察は十分であるとは言えない。思想界全体が変遷する中で、「日本仏教」の学術的言説がいかに展開していったのかを考えることが本書の趣旨である。かかる目的を成し遂げるべく、本書では、マルクス主義歴史学の「勝利」としての敗戦から始まり、1960年代のアカデミズム批判を経て、公式主義的な歴史学への反省がもたらされた1970年代まで、「日本仏教」の研究をリードした15名の営みが戦後日本思想史の文脈で回顧されている。



平成29年度科学研究費補助金採択一覧

氏名	課題番号	研究種目	新・継	研究課題名	備考
大河原知樹	15H03286	基盤研究B	継	債権法を用いた「現代中東法」のモデル化とその比較法的考察	補助金
プシュパール ディニル	16H05648	基盤研究B	新	日本、インドネシア及びスリランカにおける津波が発生しやすい地域の脆弱性評価	補助金
佐藤 雪野	17H02227	基盤研究B	新	EUにおける難民の社会統合モデル—ドイツ・ハレ市の先進的試みの可能性と課題—	補助金
池田 亮	17H02487	基盤研究B	新	1950年代の中東と北アフリカにおける冷戦と脱植民地化	補助金
小野 尚之	26370558	基盤研究C	継	生成語彙意味論に基づく名詞の事象性の日英比較研究	基金
勝山 稔	15K02211	基盤研究C	継	民間の視座を導入した中国通俗文芸受容史の構築—明治以後の民間翻訳をキーワードに—	基金
市川真理子	15K02289	基盤研究C	継	初期近代イギリス演劇における舞台のカーテンの使用方法に関する研究	基金
鈴木美津子	15K02290	基盤研究C	継	ロマン主義時代の英国小説に見られるインド表象	基金・名誉教授
藤田 緑	15K02332	基盤研究C	継	局地戦争から読み解くアフリカ文学：ボスマンとングギを中心に	基金
高橋 大厚	15K02467	基盤研究C	継	日本語における人称格制約効果に関する研究	基金
Jeong Hyeonjeong	15K02745	基盤研究C	継	明示的・暗示的言語知識テスト開発と個人差—脳科学的アプローチによる検討—	基金
渡邊 竜太	15K02927	基盤研究C	継	20世紀前半の中東欧多文化社会における社会的格差と地方財政	基金・GSICSフェロー
小原 豊志	15K02929	基盤研究C	継	19世紀アメリカ合衆国における反知性主義と「人種」	基金
青木 俊明	15K11963	基盤研究C	継	社会的コンフリクトの解決にむけた可逆的意思決定の有効性とそのメカニズム	基金
佐藤 透	15K01980	基盤研究C	継	質的知覚論の再構築	基金
劉 庭秀	16K00668	基盤研究C	継	次世代自動車普及に伴う課題導出と対策に関する研究—適正処理と再資源化を中心に—	基金
佐藤 研一	16K02525	基盤研究C	継	啓蒙ヨーロッパ文学にみる非ヨーロッパの衝撃—ドイツとイギリスを中心にして	基金・名誉教授
藤田 恭子	16K02554	基盤研究C	継	ルーマニアのドイツ語話者諸集団のアイデンティティ形成とドイツ古典主義文学受容	基金
鈴木 道男	16K02599	基盤研究C	継	ディアスポラ・アイデンティティの解体と記憶の抵抗—文学の紐帯機能の結びと修復—	基金
黒田 卓	16K03069	基盤研究C	継	ガージャール朝末期イランにおける地方政権の興亡	基金
深澤百合子	16K03150	基盤研究C	継	擦文からアイヌへ食生活形成の考古学的研究	基金・名誉教授
吉田 栄人	16K03213	基盤研究C	継	メキシコにおける多文化主義と先住民の文学的実践	基金
井川 眞砂	17K02534	基盤研究C	新	マーク・トウェイン晩年のユーモア—（笑いの武器）による批評精神	基金・名誉教授
中本 武志	17K02670	基盤研究C	新	日中バイリンガル幼児のコード・スイッチングに見られる普遍的制約	基金
勝間田 弘	17KT0117	基盤研究C	新	途上国のNGOとグローバル・ガバナンス	基金・追加
山内 玲	17K13405	若手研究B	新	アフリカ系アメリカ文学におけるカリブ海文学・思想の受容と影響に関する研究	基金
帆北 智子	17K13555	若手研究B	新	近世ヨーロッパの貴族世界と政治・外交ネットワークに関する基礎研究	基金・GSICSフェロー
妙木 忍	17K17596	若手研究B	新	医学的なまなざしと女性の身体—解剖学と展示の政治性をめぐる国際比較研究—	基金
KLAUTAU Orion	17K17601	若手研究B	新	村上專精の基礎的研究	基金
山下 博司	16K13172	挑戦的萌芽研究	継	インド映画の“新しい波”「新中間層シネマ」の誕生—インド映画研究の確立を視野に—	基金
江藤 裕之	16K13254	挑戦的萌芽研究	継	英語圏、準英語圏における英語アカデミックライティング教育の実態調査とその応用	基金
佐野 正人	16K18476	挑戦的研究(萌芽)	新	東アジアにおける戦後歴史認識の横断的研究—戦後初期と1990年代を中心に—	基金・追加

 INFORMATION 

オープンキャンパス2017 報告

7月25日と26日の二日間にわたり、オープンキャンパスが開催されました。国際文化研究科は例年通り、講義棟A棟の1階で研究科案内と留学生参加の行事、2階で研究科の各種発表会を公開で行いました。両日も天気にも恵まれ、390名の参加がありました。入試説明も兼ねた研究科案内、そして「留学生から文化の多様性を学ぼう！」と題した留学生と高校生の懇談会とはともに盛況でした。研究発表会場にも何人も



も高校生の姿が見かけられ、発表に熱心に耳を傾ける姿が印象的でした。最後に、ご協力いただいた教職員、学生の皆さんにお礼申し上げます。

(寺本成彦)

外交講座報告

10月26日、外務省よりアジア大洋州局地域政策課課長補佐、長谷川大輔氏を講師に迎えて、外交講座「日本とASEAN—グローバル化の中の東南アジア外交—」を開催した。1967年創設以来のASEANの歴史を繙きながら、加盟諸国と日本との経済面、政治面での緊密な協力関係についてご説明いただいた。

多様な政治体制と文化的特徴を持つASEAN 10カ国は50年来、地域協力の枠組みとして有効に機能してきた。各国の人口やGDPなどまちまちではあっても、東南アジアの要衝にあるこの国々は中国や米国にある程度対抗できる規模も持つ。反日デモも起こりはしたが（1974年）、日本は1977年の首脳会議で「福田ドクトリン」を表明し、3つの原理（日本は軍事大国とならない、「心と心が触れ合う」関係を構築する、両者は対等なパートナー）を打ち立て、それ以来両者は良好な協力関係を維持してきた。今日、経済・流通・安全保障の面でますます重要性を増すASEAN諸国は日本にとり、南シナ海領有などの政治的問題解決を図るためにも重要なパートナーであり続けているということであった。

当日は本研究科以外からも学生・院生が来聴した他、一般

の来聴者もあり、両方を含めて40名あまりが参加し、講演の後には活発な質疑応答が行われた。（寺本成彦）

第23回国際文化基礎講座

2016年の11月に3回にわたって第23回公開講座「国際文化基礎講座」を行いました。今回は「ことばは面白い！」をテーマに選び、17年ぶりに言語学メインの公開講座を開くことになりました。50人強の受講者が集まり、高橋大厚先生が「ことばを科学する」、岡田毅先生が「コーパスを使った英語研究と英語教育」、副島健作先生が「世界の言語の中の日本語」について講義を行い、それぞれ内容のみならず、講師の個性や教育方法の特色がよく出た講義になりました。受講者からは終了後のアンケートで「非常に有意義なお話が聞けた」、「貴重な学びの機会をいただいた」、「もっと勉強したくなった」などの好評の声があがりました。委員長として事務方や委員会でのノーハウの蓄積の力を実感しました。今後の企画も楽しみです。（ナロック・ハイコ）

日本学ワークショップ報告
「日本学の現状と課題—米独日の事例から」の紹介

2017年2月4日、公開ワークショップ「日本学の現状と課題」が開催されました。本ワークショップは小野研究科長が代表を務める学際研究重点プログラム



の一環として行われ、アメリカ、ドイツ、日本の研究者が参加しました。2010年代以降、「国際日本学」を掲げる学科や講座が多く大学の設置され、本研究科でも国際日本研究講座が新設されましたが、ワークショップでは、国内外における「日本学」の実態を様々な角度から検討しました。イリノイ大学のルパート氏は、米国の日本研究の多様性について語り、マスロー氏（現・神戸大学助教）は、社会科学と人文科学の狭間に展開したドイツの日本学の諸問題を紹介しました。大阪大学の宇野田氏は日本で最も古い「日本学研究室」をもつ大阪大学文学部の事例を取り上げ、活発な議論が行われました。2019年度に「日本学国際共同大学院」が開設される予定の本学にとって、特に有意義な企画であったと思います。（クラウタウ・オリオン）

日露ワークショップ報告

東北大学東北アジア研究センターがロシアのノボシビルスク国立大学との間で長年にわたって培ってきた学術交流実績のうえに立って、3年前より東北大学ロシア交流推進室の主催により、同センターのみならず、文学研究科と国際文化研究科のスタッフも加わって、年に1度日露ワークショップを開催してきました。とくに昨年度からは、双方の大学教員・研究者に、これから国際舞台に羽ばたいていく大学院生などの若手も加えて、日本や東アジアに関する研究発表をメインに据えた交流の場になるよう企画をしてきました。今年の2月10日に東北アジア研究センター4階大会議室を会場に2回目の若手発表中心の日露ワークショップが開かれました。研究発表や討論はすべて英語で行われ、国際文化研究科からはアジア・アフリカ研究講座に属する2名の博士後期課程の学生が意欲的な発表を行い、活発な議論を繰り広げました。ノボシビルスク国立大学からは5名の学生が主に日本関連の興味深いプレゼンを行いました。（黒田 卓）

国際文化学会報告

第24回 東北大学国際文化学会の総会が開催されました

国際文化学会とは、学際的な研究を通じて独創的な知識を育んでいくための組織です。「国際文化研究」という新しい学問分野では、人文や社会科学、自然科学の諸分野における伝統的な理論や分析方法を越えた、新しい研究アプローチが求められます。国際文化学会とは、さまざまな新しい研究アプローチを追究する研究者たちの集まりだといえます。

この学会の第24回総会が、去る平成29年7月26日(水)東北大学・川内北キャンパス国際文化研究科1階会議室において開催されました。昨年度に引き続き大会の開催がなかったため、総会のみ開催となりました。総会では例年通り、活動報告、会計報告、監査報告、次年度予算案、次年度事業予定などの確認がありました。また、次年度以降の学会活動について活発な意見交換が行われました。現在、この学会は転換期にあるといえます。引き続き皆さまの協力をお願いいたします。（勝間田弘）

学術講演会報告

研究科主催
学術講演会「農村・食・観光 ―イタリアのアグリツーリズムの発展から考える―」
日 時：2016年12月16日(金) 15:30～17:30
場 所：東北大学川内北キャンパス
マルチメディア教育研究棟6F大ホール
講演者：柳瀬明彦（名古屋大学大学院経済学研究科教授）

平成28年度も科長裁量経費をいただくことができ、研究科主催の学術講演会「(第2回) 美食のヨーロッパ文化学」を開催することができました。今回は、現代ヨーロッパにおけるワインを中心とした食文化について考える機会をもつべく、経済学分野でめざましい活躍をなさっている名古屋大学の柳瀬明彦先生を講師にお迎えしました。講演では、アグリツーリズム（農村観光）に注目し、グローバル化の時代をむかえたワインづくりの現場（農村）の観光資源としての活用がどのように展開しているのかについて、イタリア（プーリア州を中心に）の事例に即して平易に解説していただきました。豊富な現地調査にもとづいた具体的・緻密な分析を元にした本講演に、来聴者は興味深く聞き入っていました。質疑応答では実に多くの質問が寄せられ、実り豊かな講演会となりました。（野村啓介）



入学を希望される皆様へ

次の入学試験（春季入試）は、
平成30年2月15日(木)、16日(金)に行われます。

本研究科は、柔軟な思考力と広い視野および一定の語学力を有して、国際舞台で活躍できる創造的研究者または高度専門職業人になろうという明確な目的意識を持った学生を求めています。

詳しい入試情報については、本研究科ホームページ
<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/admission/information.html>
をご覧ください。

お問い合わせは、本研究科教務係において受け付けています。

連絡先

東北大学国際文化研究科教務係
TEL: 022-795-7556 / FAX: 022-795-7583
E-mail: int-kkdk@grp.tohoku.ac.jp

編集後記

国際文化研究科広報「GLOBE」第30号をお届けします。30号という節目の号に当たる今回の号では、新しい研究科長と2名の新任教員の言葉をいただきました。国際文化研究科も平成27年の再編から2年余の時間がたち、スタッフも若返りだいで軌道に乗ってきたところです。また、今回は平成27年度、28年度に退職された先生方2名からも文章をいただきました。修了生を代表して3名の方からも寄稿いただきました。例年同様、お忙しい中、寄稿いただいた教員の皆さま、修了生の皆さま、どうもありがとうございました。教員の最近の著作紹介や、日本学ワークショップ、日露ワークショップ、数々の講演会などといった最近の研究科の活発な活動の一端も窺えるように情報欄も充実していますので、どうぞご覧ください。